「それぞれの子どもらしさを求めて」より（三）

名古屋市立大高幼稚園

わたし　病気なのよ

きり子が、手を骨折したときのように曲げ、スカーフで首からさげるようにして、

「先生、ここむすんでよ」

といってきた。むすんでやると、こたつぶとんを二つ折りにし、上下のふとんにしてその中にねる。

「まあ、手をおったんですか？　たいへんですね、いたかったでしょう」

教師が見舞いにいくとより子がたくさん本をもってきて、

「みんなが、おみまいにきてくれて、こんなにおみまいもらったんですよ」

とみせてくれた。

「ゆり子（きり子のままごとにおける名前）が病気だととても大変ですわ」

とほんとうに困った顔でいう。そばで

「どうもおみまいにきてくださってありがとうございました」

とさと子がていねいに頭を下げ礼をいっていることばが聞こえてきた。傍観していることの多かった一学期にくらべ、さと子がなりきって遊んでいる姿をみて、その変化に目をみはるものがあった。

◇　◇　◇

最近はままごとの中で病気ということがよくでてくる。自分に注目してほしいという子どもの願いかもしれない。また、いろいろな物をお見舞いにもってきてくれることに対するせん望かもしれない。ままごと遊びの中のいろいろなできごとをみてみると、子どもの願望のようなものが心の奥深く秘められているように感じられる。

（四歳児　十一月二十三日）

こんな坊主めくりもあるよ

子どもたちは、お正月の遊びのつづきとして、このところ百人一首の坊主めくりに熱中していた。坊主めくりをひととおりし

てから、次の遊びにかかっていく。例によって、みさ子、やす子のメンバー五人が、きょうもさっそく遊び出した。みているときのうとは少し遊び方が違っていた。順番に一枚ずつとっていくのではなく、順番にサイコロの振り出た目の数だけ札をとる。最後の札の絵によってゲームを進めていく。

◇　◇　◇

教師は坊主めくりというひとつの概念にとらわれた遊び方しか、頭にうかばない。しかし、子どもは利用できるものは、それをうまく活用し、いろいろな遊び方を考えていく。子どもの自由な思考力や遊びを工夫していく創造的な態度を教師はおおいに学ばなければならない。

（四歳児　一月十二日）

三百円におまけしましょう

ままごとコーナーで、この頃思うことは、遊ぶ子どもたちによって、遊具の使い方が非常に違うということである。ままごと遊びの好きなきよ子のグループが、きょうは園庭で遊んでいる。いつもきよ子のグループは遊具をいっぱい出して遊ぶのであるが、洗ったおもちゃやお皿は棚にしまうというかたづけが遊びのひとつの活動となっており、場がなんとなくきれいな感じがする。きょうのとみ子たちのグループは、おもちゃを全部出してまき散らしたという感じの中で遊んでいる。いつも常に整然とした中で遊ぶことを期待していないが、あまり雑然としていると、やはり気になってしまう。

「こんにちは。わたし、おそうじやですがおそうじにきました。一回五百円ですが、いかがでしょう」

というと、より子が

「家は四百円と五十円しかないんです。それでもやってもらえますか」と答える。

「じゃ、三百円におまけしましょう」

ベッドにねていたあけみが

「でも夜なんですよ」

という。このことを予期していなければいけなかったのだと思ったが、

「じゃ、静かに、ちょっとだけきれいにして、また明日くることにしましょう」

といって、大まかにかたづけた。

「まどはしめましたから、わたしが出たら玄関のかぎをしめてくださいね」

「玄関は閉っているから、裏口からどうぞ」

「あら、じゃあ裏口から出ましょう、かぎを閉めておいてね」

「そこは自動ドアだから、いいんですわ」

◇　◇　◇

ひとつ、ひとつ教師が予想していないことばがかえってきた。きまりきったことばしかいえない教師は、まごまごしてしまった。遊びながらある程度かたづけるという

ことが、少しずつでもできるようになってほしいと思いながら、子どもとの会話をいまいちど考えなおしてみる。

（四歳児　十一月七日）

ぼく　けいさつ官

積み木を基地にしてたけや・かずよしが

「ぼくたち、消防署だよ」

「何かあったら、すぐ電話してください」

などとひとりごとをいいながら遊んでいた。教師が

「もしもし消防署ですか、火事です」

と電話をした。

「はい、わかりました。今いきます」

といって火事現場はどこでもいっこうにかまわずに保育室を「ウーウー」とうなりながら一周してきて

「はい、もう消えました」

といって楽しんでいた。そのあとはけいさつ官になっていた。けいさつ官といえば、どろぼうが連想されるのか、

「どろぼうつかまえよう」

という。しかし、かずよしは自称けいさつ官であって他の子どもはそれをしらない。どうするかみていると、きくおが、どろぼうにされてしまった。

「あっ、どろぼうだ」

ときくおはどろぼうにされつかまえられてしまった。きくおはいやそうな顔をして抵抗していたが、基地へつれていかれた。そのあとどうなったか、……しばらくして保育室に帰ってみると、かずよし、きくおがならんで製作をしていた。

「あら、けいさつ官さん」

というと、かずよしは

「もう、けいさつはやめたの。どろぼうがいなくなったから、けいさつはいらないの。きくおくんのどろぼうもいい人になったから」

とおしえてくれた。

◇　◇　◇

どろぼうになりてがいないのできくおはいつのまにか、しらないうちにどろぼうにされてつかまえられてしまったのであるが、ひとり遊びの多かったかずよしが、相手を必要としたかかわりの姿であるとも思った。かずよしのこのことばの中にあたたかいやさしさが感じられ、どろぼうごっこに対するいやな思いが教師の胸から消えた。

（四歳児　十一月九日）

小さな小さな絵本

りえ子・ゆみ・さや子・つや子が、小さな絵本を作っている。りえ子は四枚の紙に人形をかきホチキスでとめたもので表紙に〝お月さんのえほん〟とかいてある。ゆみは花ばかりかいてある花の絵本で、いかにもゆみらしい作品である。さや子は〝したきりすずめ〟と表紙にかいてあり四枚の字ばかりかいた紙をとじたものである。つや

子は人形や花、家などを画面いっぱいにかいた絵本である。それぞれの子どもが

「先生、みていいよ」

ともってくる。まわりにいる子どもといっしょに、教師の感じたままに話をしてやる。それをみてよしたか、ただしのふたりが、

「ぼくたちも　作ろう」

と紙をもってきて花をかき、四枚ホチキスでとめてもってきた。

「帰りに、これ見てね、おはなししてね」

という。降園のとき、クラスの子どもたちにふたりの作った絵本をみせながら話をした。ときどき作った子どもが

「それはね、根っこもついているよ」

「花が咲いたところだよ」

とか、説明をしてくれる。子どもたちは、じっと楽しそうにみていた。

◇　◇　◇

一枚ずつの絵や話はつづいていないと思われるのだが、子どもはつづいている話のつもりでいることがうかがえる。小さな紙きれのような絵本であるが、子どもたちはたいへん興味をもってみていた。

子どもの作品はとりあげかたによって、作品が生きてくるということを感じた。またそれによってまわりの子どもへ大きく反映していくことを思った。

（四歳児　十一月十一日）

ぼく　うれしくて　うれしくて

園庭で五、六人の子どもが、鉄棒をしていた。さかあがりができるか、できないかをいいあっている。

「ぼく、できるかな？」

と、まさみがつぶやく。

「先生が手伝ってあげるから、やってごらん」

最初は、さかあがりの要領が全然わからなくて、前まわりになってしまう。足をあげることを知らせると、次にはすっとできてしまった。鉄棒にからだをつけて、足をあげる要領をつかんだという感じであった。

「まさみくん、初めてできたの？」

「うん」

きょうは幼稚園で講習会があり、まさみの母親もきているので、教師が

「じょうずにできたから、あとでお母さんにはなしてあげなきゃね」というと、

「もう話したよ、ぼくうれしくて、うれしくて」という。

本当にうれしそうな表情であった。

◇　◇　◇

うれしい気持ちをこのように、ことばで表現することは少ないように思うが、きょうのこのまさみは、「ぼくもできるようになった」というこの喜びの大きさが、〝うれしくて、うれしくて〟ということばにあらわれていることを感じ、教師もうれしくなってしまった。（四歳児　十一月十四日）

せんせい　わたしとあそぼう

つや子は、いわゆる〝いい子〟といわれる子どもで、自分を出すよりがまんすることが多い。友だちとの関係でもその状態の積み重ねであり、子どもらしさにかける面がみられる。自分で何かをするとき顔色をみることがある。つや子にかかわろうとするとかまえられて、なかなかつや子の中へはいることができなかった。しかし、なわとびを通して接することが多くなってきたこの頃、教師に対するかまえがなくなってきたように思われる。このようなきざしのみえてきたある日のできごとである。

昨日、つや子とさき子が、人形と手り剣（折り紙二枚をくみ合わせて作ったもので、子どもたちは手り剣という）を星にみたてペープサートをして遊んでいた。きょうは、封筒に目・鼻をかき穴をあけて、手を入れてみせにきた。

「あら、かわいいわね。これつや子ちゃん自分で作ったの？　こんないいものが作れるんだね」というと、

「じゃあ先生あとで遊ぼう」

と声をかけてきた。そして、封筒の人形をもって園庭へ出ていった。教師も袋に顔をかいて手にはめ園庭へ出た。すると人形をはめたつや子が近づいてきて

「こんにちは」という。

「こんにちは、遊びにきたわ」

「ねえ、こっちへおいでよ」

といって、ブリッジの所へつれていく。

「ここね、ぼくのおうちだよ」

という。さき子も人形をもっていっしょに遊んでいたが

「そうよ、お家なの、わたしはお姫様なの」

と説明してくれた。つや子の人形は男の子であり、つや子自身も男の子になりきっていた。

「ここね、階段だよ、トントン」

といって、つや子はブリッジをあがる。

「あがっていいかしら」ときくと、

「いいよ、きょうとまっていっていいよ」

「ありがとう。ではとまっていくわね」

「鉄棒しようよ」

とさき子がさそう。

「いいよ、じゃいこうか」

といって、つや子、さき子と鉄棒のところへいく。つや子とさき子は封筒の人形を鉄棒にのせて、いかにも鉄棒をするように、くるくるとまわす。

教師も同じようなことをしたり

「こんどは鉄棒にこしかけよう」

といって、人形を鉄棒の上にのせてこしかけているようなふりをしたりして遊ぶ。

「ねえ、きみ天にいこうよ、ぼくの背中におのりよ」とつや子がいう。

つや子の人形の上に教師の人形をかさね桜の木の所までとんでいく。

「ああ、いいきもち、天っていい所ですね」どこから「天」という言葉が浮んできたのか不思議である。しばらくすると女の子が

「先生なわとびしよう」

とよびにきたので、つや子に

「いっしょに遊んでくださってどうもありがとう。もう家へ帰らなきゃ、いまからみんなとなわとびをするの」

というとつや子もしたいということで、みんなといっしょになわとびをはじめ、この人形ごっこは終った。

◇　◇　◇

今までつや子と外観からしか接することができなかったが、きょうは人形をもったこの遊びの中でちがったかかわりができ、積極的な一面がみられたことは教師としてうれしいことであった。きょうの遊びの中で、この封筒人形が大きな役割を果したといえる。つや子のことばは人形がいっているのであって、つや子自身ではないといった安心感があったのではないかと思う。このような遊びは舞台でするものといった概念があったが、人形即自分であるといったこの時期に、人形を持ち出したこの遊びはよかったのではないかと思った。

（四歳児　十二月四日）

ペープサートであそぼう

人形劇の舞台を用意しておいたが、きょうは、まり子たちもやるようすもなくずっとあいていた。しばらくして、ちから・ひさお・くにおが、

「遊ぼう」

といって、ペープサートで遊びはじめた。さっそく、教師は観客になって見ることにした。教師がみていることを意識して、てれているのか、なかなかはじまらない。教師といっしょにみている子どもたちが、しんぼうづよくまっているのにはおどろく。やっと舞台に人形を出す。

「遊ぼう」

という小さい声がきこえてきたが、あとがつづかずとぎれてしまった。

◇　◇　◇

この子どもたちの場合、客となってみたことは失敗であったと思う。

○客として堂々とみてやる場合

○そっと見守って、あとで認めてやる場合

○教師も演ずる人になって一緒にする場合

など、その子・その時・その場にあった教師のかかわり方があり、それを見きわめることのむつかしさを痛感した。

みていてやることによって、子どもの意欲が盛りあがる。気をつけなければならないことは、おとなの考えるまとまった人形劇を期待しないことであろう。また、誰もいない所でやろうとする子どものために、ある期間保育室のすみに、舞台を設置しておくことも大切であると思った。

（四歳児　十二月十一日）